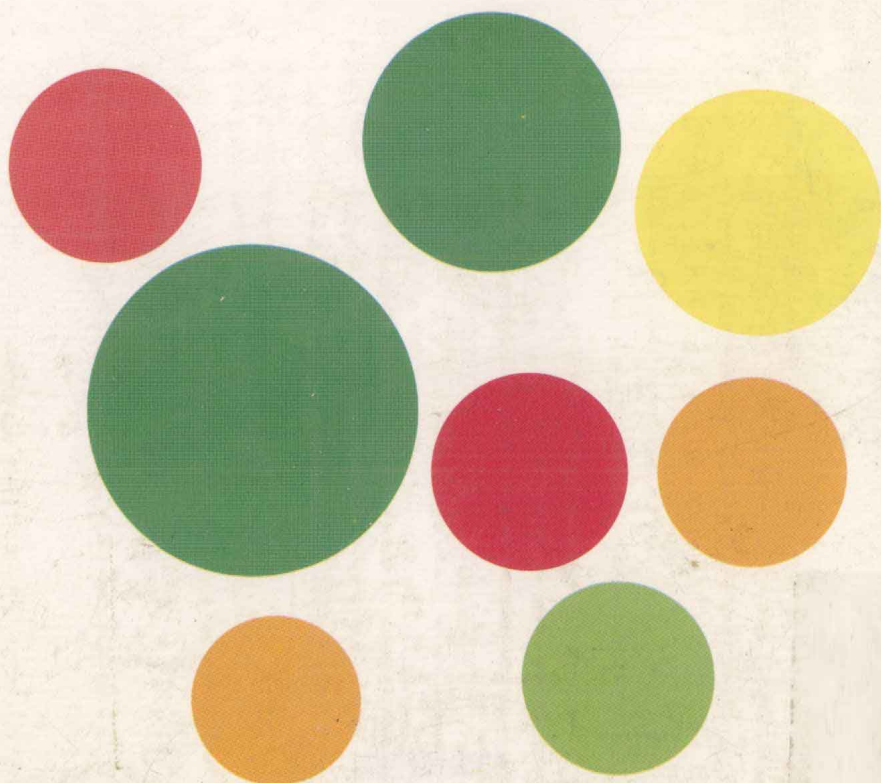


私たちの書いた現代史

女子中学生たちの父母の歴史



私たちの書いた現代史

女子中学生たちの父母の歴史

あゆみ出版

私たちの書いた現代史

1985年3月5日	第1刷発行	定価1300円
編者	山脇学園「父母の歴史」編集委員会	
発行所	株式会社 あゆみ出版	
	〒112 東京都文京区春日2-17-3	
	電話 03(815)5511(代)	
	振替 東京8-10590	
印刷所	新協印刷株式会社	
製本所	根本製本株式会社	

落丁、乱丁の際はお取りかえします。

0037-270654-0086

私たちの書いた現代史*もくじ

明治・大正の生活

鉄道馬車・一銭蒸気……………	相良多恵子
婦人参政権を夢みて……………	河辺 良子
尼になって「家」に反抗……………	末広 美春
常磐津・裁縫・たばこ店……………	三橋 孝子
親より三步下がって……………	笹間 千枝
パン屋ひとすじに……………	谷川恵美子
「平民の学習院」山脇に学ぶ……………	河野里恵子
北洋漁業の基地で……………	渡辺三智子

関東大震災

大音響とともに二階が落ちて……………	田知 慶子
火の粉の下での逃避行……………	長谷川秀子
隅田川には何百もの死体が……………	坂本 直子
「朝鮮人が毒を」のうわさにおびえ……………	澤田 一恵

外地での生活

戦争・空襲の体験

「ソ満国境」の町にて.....	豊田 栄子	57
満州の夏と冬.....	小森 千枝	61
朝鮮で生まれて.....	河内 美紀	75
いばりかえっていた日本人.....	三上 奈弓	79
中学校で受けた軍人教育.....	青木 郁子	85
衣料よりもまず食糧.....	阿久津幸子	88
女学生も火薬工場へ.....	山崎 洋子	93
本郷から駒場まで銃を担いで.....	神足 好子	97
空襲下、傷病兵を看護.....	坂本 一恵	99
陸軍経理部将校として.....	野田 明美	102
呉から見た広島のかのこ雲.....	音 恵美子	107
焼夷弾で我が家が火の海.....	久保 紀子	112
あこがれの海軍で死ぬ苦しみ.....	大島小夜子	114
逃げ遅れた妹が爆弾で.....	朝倉夕美子	117
学校が軍需工場に変えられ.....	望月真知子	119
かぼちゃのおかゆ、すいとん.....	小葉智香子	121

外地での戦争体験

特攻訓練中に迎えた終戦……………	叶 文乃	127
仏像を抱えて戦火の街を……………	田中 季絵	130
焼けあとのサツマイモ……………	五十嵐みゆき	136
宇都宮にもB 29が……………	及川 浩子	143
焼け跡のかわりに記した伝言……………	中川 訓子	149
じゅうたん爆撃の真下で……………	三枝 千秋	152
死んだ赤子を背に負って……………	小倉 直美	158
密林の島で食糧を求めて……………	秋山千枝子	163
疲れはて眠りながらの行軍……………	稲葉由美子	166
カエルやトカゲはごちそうだった……………	平井 優子	168
シベリアの収容所にて……………	土師野 恵	171
乗っていた船が撃沈されて……………	山崎亜粧子	174
中国通の分隊長として……………	大森真裕美	177
国共内戦下、八路軍とともに……………	中沼 麻衣	182
潰滅部隊で奇跡的に生き残る……………	永井千由紀	186
六年間、戦地を転々……………	飯島 史枝	194

疎開生活

質素な食事で栄養失調に	上杉 広子	207
疎開先で自然を知る	佐竹由美江	210
島根に逃れて傘づくり	熊野弥生子	215
食べられるものは何でも拾って	横川 静華	222
疎開先も焼夷弾に焼かれて	中村 愛	225

戦後の生活

飢え死にさせる法律に疑問	鈴木 優子	231
ベニヤ板のしきりの教室で	矢田 智砂	234
母も山脇に学んで	宮越真由子	238
年 表		243
「父母の歴史」の指導にあたって		250
H・Rで		258
あとがき		260

作文執筆者名の横の年度表示は中学二年生時の年度です。

明治・大正の生活



(1983年版の表紙)

鉄道馬車・一銭蒸気

相良多恵子

(昭和36年度)

私の祖母は、当時京橋区新富町のにぎやかな町に明治二十九年に生まれました。その頃の新富町という所は、今でいう歌舞伎座のような劇場「新富座」が建っていた所で、座が開幕するとそれはにぎやかになるそうです。

その頃、大都市である新橋、上野に大変近かったせいか、祖母はよくお父さんと一緒に鉄道馬車に乗ったそうです。鉄道馬車というのは、新橋と上野間を走っている馬車のことで、道路に二本の線路が敷いてあり、その上にマッチ箱のような小さな車体がついてそれを二頭の馬が引く簡単なものです。ですから馬が走らなければ馬車は止まってしまいますし、満員になれば馬は引っぱれなくなり、そのたびに乗客は車内で待ったり、降りて歩かなければなりません。けれど、料金は大人三銭、小人一銭五厘と決まっていました。また、祖母は、隅田川を通っている船で一人一銭取られるので別名一銭蒸気ともいわれている蒸気船にもよく乗ったそうです。

こんなふうに新橋、上野あたりは大変発展していき、またその後銀座も今のように商店は並んでいませんでしたが、レンガの建物が建ち並び交通も激しくなっていました。でも、今の東京駅付近は草地で、丸の内あたりはすりばち山があり、低い所にはため池があったそうです。また

浅草も今は大変にぎやかですが、その頃観音様から裏は浅草田んぼといって全部田畑で、その先も吉原田んぼがあったそうです。そしてその先には、尾久村という農村がありました。

今考えると本当にうそのような気がします。でも、今の東京駅付近で昔は遠足したり花つみをしたりしたのだと考えるだけでも楽しくなります。

文明開化時代、都市も発展し、いろいろな面で新しくなりましたが、一つだけ新しく変わったように変わらないものがありました。それは、士農工商の身分制度です。

私の祖母の父は静岡県の藩主で、石高千二百石くらいの徳川家の早くからの直参旗本でした。旗本というのは、どんなに外様大名の方が石高が多くても、いばっていました。ですから経済的な面で力がなくても実際には大変權威があったことでしょう。また、本所松坂町には御下屋敷があり、静岡県の屋敷から参勤交代で江戸と往復することもあったようですが、たいてい、外様大名と一緒にいく事が多かったようです。このように、明治維新までは大変いばり、また豊かな暮らしをしていましたが、幕府が倒れると生活が苦しくなってきました。その後、祖母の父は日清戦争へ水雷技師として出征しました。

その翌年父が帰り、祖母が生まれると父は写真機屋をやリ、生活を立ててゆく事にしました。その頃の写真機屋というのは、今と違って大変珍しいものであり、また重要な技師として扱われていたため、生活は安定したようです。この頃、歌舞伎界の中で活躍していた六代目菊五郎も、このハイカラな写真技術を習いに来ていたという事です。それから、どんなに写真機が普及していなかったか、一部の人だけで使われていたかという事がよくわかります。

大正二年、もう祖母も十七、八歳になっていた頃です。祖母は、年老いた父の手助けをいくらかでもしたいと思い、女工を志願しました。しかし父は「貧乏はしても女工にはさせない」といって祖母を叱ったそうです。

こんなふうに、女工だけでなく士族以外の平民をいやしいものとしてあつかっていましたから、祖母は学校生活の中でも家庭生活の中でもこの習慣に従っていました。ですから、祖母も学校の書類に士族と書き込むことを大変はこらしく思っていたそうです。

祖母が生まれたのが明治二十九年。ここに書いたことは、だいたい祖母が二十歳になるまでの大正三、四年位までの生活状態で、この間の日清戦争、日英同盟、日露戦争の時のことは、あまり祖母に大きな影響をあたえなかったことと、その大正と昭和初期は、皆さんが書く中心になっている時代ですので、その時代はぬかし、明治初期のことを主に書きました。

祖母の昔の話は、私にとって大変興味あるものでした。しかし、私はこの時代に生まれていないくて良かったなあとつくづく思います。平民！ 士族！ と分けられた生活はどんなにいやなことでしょう。たとえ、私の祖母のようにわりに恵まれた家庭にあったとしても、結局幕府が倒れてからいやな思いをしたわけです。ですから、祖母は、この話をした後、

「士族、平民と区別させられ、私はいばっていられたけれど、やっぱり今のようになんか自由な方がずっといいね。多恵子は、戦争の時にも、明治初期の乱れた日本にも生まれなくて幸せだね」と遠くを眺め、思い出すように言いました。

婦人参政権を夢みて

河辺 良子

(昭和36年度)

ふり返って四十年程前、もう大正十年頃になっていましたから、都市の発達も生活の面も、外国の文明文化にならって成長していました。

その頃の私達女学生は、新聞に載っている西欧の記事や写真、雑誌の読み物に憧れを持っていました。

中に多少政治について関心を持つ学友が三、四人いて、日本の普通選挙運動の話題になると活気が湧きます。折から雑誌によって、外国では婦人に参政権を与えられているのを知りました。日本では、まだ、男子も一般には衆議院への選挙権も与えられていなかったので、普通選挙運動が強まっていたわけもうなずけました。

地歴の時間中に、私が突飛な質問をしました。当時、流行語のような「デモクラシー」の意味を知ろうとしました。先生は黒板に「社会主義」と書かれました。「わかりました！」なんていいましたが、その実、わかりませんでした。

こんな程度でも私は気がさして来ましたが、お休み時間になると、四、五人の友達が寄って来て「婦選が通って立候補したらあなたに投票するわ」なんて冗談も出ました。難しい雑誌を持っ

たり、新しい記事を見つけたりすることに興味を持つ年代でした。

婦人参政権が獲得されれば、それだけ社会が明るくなると思いました。私達の生活から出る細かい問題は、話しやすくなり解かれる速度が出ると思います。

第一、婦人が社会の表に出て自分の目で見聞してお互いに学びあえることが、生活の意義と幸福と思いました。そして、この幸福をわかちあいたいと思いました。グループの学友一人が転校し、卒業間近になって、また一人が病没してガッカリさびしくなると、私一人が、婦人参政権獲得の夢語りを難しい雑誌にささやきました。

グループではない学友とは園芸と裁縫が重点の学校でしたから、休み時間には運動の練習や競走もしました。園芸の実習には開放された気持ちでにわとりや犬のように、菜園の土をふみ歩いたものです。

尼になって、家に反抗

末広 美春

(昭和39年度)

宿題の出た時私は考えました。

「大正末から昭和の父母では若すぎるし、困ったなあ。誰に頼もうかしら」と思い、母に相談しました。そして十一月末に他界した祖母の事を、母や伯母達に聞いて書く事にしました。

末広津ぎ、明治十一年四月二十四日、石川県に生まれる。

その頃の小学校は四年制で高等科に進んだ頃、県会議員をしていた父（曾祖父）が金沢で県議會中に急死し、それまでの豊かな暮らしから、本家の助けがなくては母娘五人（祖母は四人姉妹の次女）の生活もたたないようなったそうです。

そして祖母は十四歳の時に、隣村のお寺の次男で、祖母が小学二年の時の先生で、東京の毎日新聞の記者であった祖父の所に嫁入る事になり、簡単な式をすませて、翌日には馬車でくりから峠をこえ、東京につれて来られたのです。

その時祖父は二十六歳。それまで母や姉にたよって、何一つ家事をした事のなかった祖母は、御飯も炊けずにとほうにくれたそうです。そして、大家さんの奥さんから、二人なら茶わん一杯とひとにぎりの米をこのくらいの水で炊きなさいと教えられ、いくら御飯があまっても同じだけ炊き、あまった御飯は、野良犬が来て食べるだろうと、近くの電信柱の下に捨ててきたそうです。

十六歳の時、長女操出生。十八歳の時、親同志の感情のゆきちがいから、突然本家の下男に無理やり田舎につれ帰されてしまい、翌年には、たよりの母親に急死され、あまりの悲しさに、とうとう曹洞宗の尼寺に入り、名も義光尼と改め俗世をすててしまいました。

数年間仏につかえたものの、人々の布施で生活することに疑問を持ち、明治三十五年四月、日本赤十字に入學、三十七年卒業、病院に勤務するようになりました。そして、日露戦争中は病院船に乗ったり、陸上勤務をしたり救護に当たり、三十九年には異例の抜てきをうけ婦長になりました。